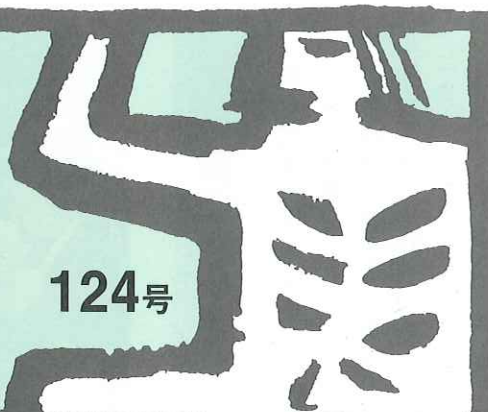


ピース・ウイング長崎 会報

へんりく

124号



■財団法人長崎平和推進協会 〒852-8117 長崎市平野町7番8号 ■電話(095)844-9922 FAX(095)844-9961
<http://www.peace-wing-n.or.jp>

■国連軍縮週間「市民のつどい」 ■アジアの若者によるネットワーク構築を通じた平和・国際交流のためのプログラム ■設立記念講演・写真コンテスト表彰式 ■被爆体験講話映像化事業
■深堀写真資料調査部会長「社会ボランティア賞」を受賞 ■TOPICS



国連軍縮週間「市民のつどい」で、平和のメッセージを空に飛ばしました。

平成21年10月24日(土)原爆資料館玄関下広場にて

国連軍縮週間「市民のいぶき」

秋晴れというには、少しどんよりとした天候ではありましたが10月24日(土)、国連軍縮週間「市民のいぶき」を開催しました。

市民大行進に参加した、市民や子どもたち・観光客、それにおりから入港した国際観光船の乗客などで、会場となった原爆資料館玄関下の広場は昨年にも増してたいへんな賑わいを見せました。

そのような状況のなか、部会員や事務局スタッフは毎年のこととはいえ、慣れない作業に奮闘しながら、その賑わい振りに嬉しい悲鳴を上げていました。



戦時食コーナー

長崎県地域婦人団体連絡協議会の方々の指導を受けながら、今年も活水高等学校平和学習クラブの生徒たちが、戦時食づくりに協力してくれました。

生徒たちが一生懸命こねた団子

やかぼちゃなどを入れただんご汁をつくり、外国の人や観光客、市民大行進を終えた参加者らに振舞ったほか、その一角には、タンポポやユキノシタの野草の天ぷらに加え、野菜の皮を使ったキンピラや芋団子など戦時中の十種類あまりのおかずも用意され、コーナー全体で乏しかった戦時下の食生活を体験してもらうことができました。

さらに、今年初めての試みで、一升瓶に入れた玄米を棒で突いて精米す



初めての「玄米搗き」

る「玄米搗き」の体験コーナーも設けられ、行進に参加した小学生もやり方を教えてもらいながら楽しそうに挑戦していました。



変わらぬ人気の「戦時食コーナー」



「環境に優しい紙風船コーナー」
毎年多くの子どもたちで賑わいます。

環境に優しい紙風船コーナー

好みの色の紙風船を手に、絵やメッセージを懸命に書き込む小学校の低学年生や保育園児のほほえましい姿を見ながら、我々スタッフは継承部会の方と一緒に、書き込みを終えた子どもたちが次々と差し出す風船へのヘリウムガス充填に追われました。中には、国際観光船の乗船客によるものであろう外国語のメッセージの入った風船もあり、準備した250個の紙風船は、子どもたちの手により大空に放たれたり、持ち帰られたりとまたたく間に無くなってしまい、風船の人気の高さにスタッフ一同驚いてしまいました。



「折り鶴コーナー」

折り鶴コーナー

市民大行進に参加した市民やおぜいの子どもたちが立ち寄り、だんご汁や綿菓子をはおぼりながら鶴を折ってくれました。

この日は国際観光船が入港したこともあり、乗船客が原爆資料館見学の前後に参加してくれました。折り方を教えてもらいながら、「この折り鶴はどうするのか」などと質問をあげ、国際交流部会員が核保有国や世界の平和団体などに送ることを話すと、自分の折り鶴もその中の一羽になるのかと喜んでいました。みなさん、部会員との会話を楽しみながら、慣れない手つきと笑顔で挑戦しており、よい国際交流にもなったようです。

また、市民からもこの日のためにたくさんの折り鶴が寄せられており、みんなの協力でその日のうちにこれらの鶴とあわせて千羽鶴にすることができました。国際交

流部会ではこの千羽鶴をアメリカのオバマ大統領に送ることにしています。

チャリティコーナー

少し雲の多い秋空のもと、綿菓子機とポップコーン機にスイッチを入れ、試作を兼ねていよいよ作業開始です。始めはお客さんもまばらでしたが、午前10時を過ぎた頃から多くの市民、特に子どもたちが例年どおりに押し寄せ、またたく間に長蛇の列となりました。平和大行進に参加した子どもたちが、平和会館で行われる映画上映会などに行く途中で立ち寄ってくれたものです。

混雑のなか、お互いに譲り合いながらも綿菓子やポップコーンを手にした時の笑顔がスタッフを元気づけてくれました。

国際観光船の乗客も物珍しさに覗き込み、一時は国際色豊かな交流の場となりました。

我々スタッフは、一人でも多くの人たちに提供できるようにと綿菓子とポップコーンの油にまみれながらの作業でしたが、子どもたちや多くの人々の笑顔に癒されて平和な一日を締めくくることができました。



多くの子どもたちで賑わう「チャリティコーナー」

被災写真展示コーナー

今年も原爆被災写真展が、写真資料調査部会員の手により実施されました。平和大行進の参加者や外国の方も写真の前に立ち止まり、部会員の説明に耳を傾けながら、一枚一枚熱心に見つめていました。



「原爆被災写真コーナー」

紙芝居コーナー

ピースバトン・ナガサキ

戦争を知らない世代として育つ子どもたちに、少しでもその実態を知り、考えてもらう機会を増やそうと、今年も朗読や紙芝居を実施しました。

小学校低学年の児童のために今年「かわいそうなぞう」「あおよ、かえってこい」など、動物をテーマにした作品を加え、理解や共感を深める配慮をしました。画面を見つめ、話に聞き入る子どもたちの目は真剣です。決して面白いとは言えない戦争に関するものがたり、しかし語り継いでいかなければ消えてしまいます。

これをきっかけに子どもたち自身が戦争について学び、家族と話し合う機会が増えることを願っています。



紙芝居に見入る子どもたち

アジアの若者によるネットワーク構築を通じた平和・国際交流のためのプログラム

追悼平和祈念館では、交流ラウンジにて11月21日(土)から23日(月・祝)にかけて、「アジアの若者として核兵器廃絶のために何をすべきか、何ができるか」をテーマとしてアジアの若者による平和実現のためのネットワーク作りを目指したプログラムを実施しました。

21日(初日) 若者のグループ討論

日本人学生、社会人、長崎在住の留学生や現地から招いた韓国人学生(2名)、マレーシア人学生(2名)などのアジアの若者が、今回のテーマについて考えていくとともに、昨年10月に発足した若者による平和のためのグループ「アジアピースネットワーク(A-PN)」を拡大していくための手法やその具体的な活動について

グループ討論を行いました。



マラヤ大学(マレーシア)の学生による研究発表のようす

この討論では、「活動にあたっては被爆者の生の声を聞くなどまず原爆や核兵器に関してよく知る必要がある、そのための勉強会を開催すべきである。」「長崎、韓国、マレーシアを基点として定期的な交流を行い、アジアの国同士の間をさらに深めていく必要がある。」や「活動の成果をPRし、A-PNの認知度を高め、また、メンバー同士の情報交換・共有を行うことができるようにするために

ホームページを立ち上げるなどインターネットを活用してはどうか。」との意見が出されました。

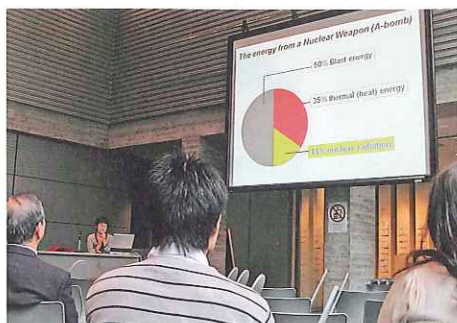
また、マレーシア人学生からは、自主的な活動のための資金作りとして、古本を大学内で販売したり、新聞や空き瓶のリサイクルに取り組んだりしてはどうかとのアイデアもでました。A-PNとしては、今回参加してくれたメンバーにも広く参加を呼びかけながら、これらのアイデアを具体化し、実行に移していくことにしています。



22日(2日目) 専門家による講演

活水女子大学の岩永正子教授、また、平和推進協会が実施している「アジア青年平和交流事業」の現地協力機関でもあるマレーシア・マラヤ大学のモハメド・ナスルディン准教授並びに韓国・釜山国際親善協会の李相烈常任理事による被爆医療や国際関係論などのそれぞれの専門分野からの講演が行われました。

岩永教授の講演においては、白血病や各種ガンなど原爆の放射線が人体に短期、長期に与える影響についてわかりやすく解説していただきました。会場からは放射線を浴びることによりどうしているのか、被爆二世に対する影響はないのか、などの質問が相次ぎました。



講演「原爆放射線の医学的影響」
岩永正子教授（活水女子大学）

ナスルディン准教授の講演においては、アジア青年平和交流事業や祈念館の今年度の海外原爆展を通じて築かれたマラヤ大学との緊密な信頼関係が今後さらに発展していくことが平和な世界をもたらし、していくために不可欠であること、を熱く語られました。会場には海外原爆展でマレーシアを訪問した被爆者もかけつけ、海外の若者に被爆の体験を伝えていくことの重要性について意見を述べられました。

また、李常任理事の講演においては、ご自身の国際交流への取り組みを踏まえつつ、戦国武将の織田信長、豊臣秀吉、徳川家康にまつわる有名なホトトギスの俳句を例にあげながら戦争、平和につい

て、ユニークな視点からお話しただきました。会場からは、国際交流を行っていくために心がけるべきことなどについて積極的な質問がなされました。



23日（最終日） 在外被爆者の体験講話

ピースネット（インターネット会議システム）を通じて、アメリカ・サンディエゴ在住の日本人被爆者カーペンター・すえ氏の被爆体験講話が行われました。すえ氏は、11歳の時に長崎で被爆し、その後、アメリカ軍人と結婚、1966年にアメリカに移住されました。講話では、被爆時の悲惨な体験だけでなく、渡米後、満足を医療を受けられなかったことや日本

人に対する差別、さらにはご自身や子どもたちの健康不安について語っていただきました。ピースネットを通じて在外被爆者の講話を聞くのは今回が初の試みであり、これまで私たちがよく知らなかった様々なつらい経験を聞くことができました。

また、現在こうして自分が生き残っていることの理由、使命は、戦争や核兵器に対して反対を訴え続けることであると力強く述べられ、会場の聴衆も平和の実現に向けて心一つにしたのではないかと思います。

今後は、このピースネットをさらに活用し、在外被爆者との交流を積極的に進めていく予定です。

今回のプログラムは、専門の立場から講演を行っていただいた諸先生方、マレーシアや韓国から長崎まで来ていただいた学生のみならず、アメリカのサンディエゴから自らのつらい経験を語っていただいたカーペンター・すえ氏をはじめとするたくさんの方々のご協力やご来場いただいた多くの方々のみなさんのおかげで盛況のうちに終えることができました。

祈念館としては、今回の交流プログラムをアジアの若者による平和のためのネットワーク作りの第一歩と位置づけており、平和推進協会と連携、協力しながらネットワークの一層の拡大、強化を進めていくことにしています。



ピースネットで祈念館とアメリカのサンディエゴをつなぎました



協会設立記念講演決定！ 平和写真コンテスト表彰式も同時開催

財団法人長崎平和推進協会設立25周年記念事業

平和写真コンテスト表彰式

財団法人長崎平和推進協会設立記念

三遊亭好楽

林家花丸
林家染二

「平和寄席」

とき

平成22年2月13日(土) 12時50分開場、13時15分開演

ところ

長崎平和会館ホール(平野町)



「笑点」でおなじみ！

三遊亭 好楽さん

入場は無料ですが、入場はがきが必要です

お申し込み

往復はがきに郵便番号、住所、氏名、電話番号をお書きのうえ、下記宛先にお送りください。1枚につき1人の応募となります。(ただし、協会会員は1枚につき2人まで応募可)

宛先 〒852-8117 長崎市平野町7-8

(財)長崎平和推進協会「平和寄席」係

締切 1月30日(土)消印有効(応募者多数の場合は抽選)

抽選は協会会員を優先します。会員の方は申し込みの往復はがきに必ず「会員」と朱書きしてください。

※駐車場に限りがありますので、来場の際は公共交通機関をご利用ください。

問い合わせ

(財)長崎平和推進協会 電話 095-844-9922 (平日8:45~17:30)

一緒に平和の輪を広げませんか？

会員加入のご案内

長崎平和推進協会では、被爆体験と平和の尊さを次の世代に伝える「被爆体験講話」や原爆資料館や被爆遺構を案内する「平和案内人」の派遣など平和に関する活動をしており、このような活動を進めるため、新たな会員の方を募集しております。

ご興味のある方には、協会より詳しいパンフレットをお送りしますので、会員のみならず、ご家族、お知り合いの方にご紹介くださいますようお願いいたします。

被爆体験講話の映像化事業、始まる

追悼平和祈念館では、来年度に被爆65周年を迎えるにあたり、今年度から継承部会員の方々が実施されている被爆体験講話を収録し、映像化する事業を始めました。

この事業は、追悼平和祈念館の「被爆体験を後代に継承するための情報収集と提供」、「永遠の平和祈念」という設立目的に基づいて計画されたもので、協会の継承部会員の方々が、長年にわたって自らの被爆体験を語ることを通じて、平和の礎を築こうと尽力されており、この貴重な講話のようすを後世に残し、伝えることを目的として、協会及び継承部会の部会員の方々がご理解とご協力をいただきながら実施するものです。

今年度については、修学旅行のシーズンがほぼ終わり、講話の予定が残り少ないことから、松尾幸子さんと永野悦子さんの2名の方の講話を収録して、映像化する計画です。12月から収録を始めており、3月末までにDVDとして完成させる計画としています。



12月15日、松尾幸子さんの講話収録

制作したDVDは、追悼平和祈念館で半永久的に保存するほか、将来的には、被爆体験を後代に継承し、永遠の平和を祈念するといった追悼平和祈念館及び協会の事業目的に沿って利用したいと考えておりますが、被爆体験講話は聴講者のみなさんが講話を行う継承部会員の方から直接聴いていただくことが被爆体験の継承にもっとも効果的で、ふさわしい形であると考えておりますので、被爆体験講話の活動には妨げにならないように配慮していきたいと考えています。

深堀部会長、社会ボランティア賞を受賞

11月17日(火)、写真資料調査部会長である深堀好敏さんが、京都市にあるソロプチミスト日本財団から、地域に根差して地道にボランティア活動を続けている個人や団体に贈られる「社会ボランティア賞」を受賞しました。

今回の受賞は、協会が設立される前の1979年(昭和54年)、現在の写真資料調査部会の前身となる写真調査会が発足してから現在までの30年間、さまざまな写真を収集し、被爆後の写真の撮影場所を特定する地道な活動を続けてきたことが評価されたものです。

深堀部会長は、「この賞は、私たちの地道な活動が評価されたもので、発足当初からの仲間を代表していただいたという気持ちです。被爆者は、いずれ亡くなっても、写真は被爆の実相を伝え続けられるという思いで、活動を始めました。これからも、初心を忘れず、生涯活動を続けていきたいです。」と受賞の感想を述べられました。

各県から選ばれた候補者のな

かから全国で受賞することは、たいへん榮譽のあることで、非常にすばらしいことです。

なお、ソロプチミスト日本財団とは、1921年にアメリカのオーケランドに創設された管理職・専門職についている女性の国際的な組織の日本支部で、主に人権と女性の地位を高める奉仕活動をしています。

ちなみに、同財団のホームページの説明によるとソロプチミストという言葉は、「soror(ソロ(姉妹))と「optima(オプティマ(最良))という2つのラテン語から作られたもので、「女性にとつて最良のもの」という意味であるとのこと



受賞した深堀写真資料調査部会長

ピースネット初の3点接続

祈念館では、初の試みとして、12月11日(金)に祈念館、長崎市立形上小学校、山形市立東小学校の3ヶ所をピースネットで接続して平和学習を行いました。当日は、形上小の児童が長崎原爆について東小の児童に説明し、その後、継承部会の山脇佳朗さんが講話を行いました。講話後は、両校の児童同士で平和や地元の文化、歴史について意見を交わしました。祈念館では、これを機にピースネット事業の拡充を図っていくことにしています。



継承部会被爆遺構巡り報告

奥村アヤ子碑巡り班副班長から報告が寄せられましたので、ご紹介します。

10月18日(日)、集合場所の中心地には、約50名の参加者が集まりました。

今回は油木町を主に伝えようと、福田須磨子さんの詩碑から、市立商業学校の生徒さん達が掘っていた防空壕の跡、油木町防空壕跡、吉田勝二碑巡り班長の被爆場所、国鉄官舎跡、下大橋、とコースを設定しました。班員全員が一度は説明するように担当を決め、コース確認と説明時間配分のために二度下見を行いました。班長が体調を崩されて不参加となり、不安でいっぱいでした。

実際は参加された方々に熱心に説明を聞いていただき、その見学の様子に一安心しました。商業学校生が掘った防空壕や継承部会の下平作江さんが被爆した油木町防空壕では、皆さん、興味深そうに内部を覗いてみたり、写真に収めたりしていました。また、吉田さんが被爆した場所は見晴らしがよく、爆心地からの距離を感じる事が出来ました。火葬場として利用されていた国鉄官舎跡では、その場で家族を荼毘に付した池田早苗さんから体験談を聞くことができ、貴重な体験になったと思います。

皆様のご協力で怪我もなく、時間通りに無事終了することが出来ました。説明にご協力いただいた平和案内人さん、資料を提供して下さった写真資料調査部会の方々へ感謝の気持ちでいっぱいです。有難うございました。

公益財団法人を目指します

長崎平和推進協会などの国や県から許可を受けて設立された公益法人の設立・運営の要件は、これまで主務官庁の裁量に委ねられていましたが、法令による根拠の明確化などの目的で、制度改革関連法が施行されました。この法律により平成25年11月末までに公益財団法人や一般財団法人などに移行しない法人は自動的に解散することになります。

そのため、協会では公益財団法人への移行を目指して準備を進めていますが、新しい法人への移行は事業活動に影響を及ぼすものではなく、引き続き平和の輪を広げるための活動を行ってまいりますので、よろしくお願ひします。

- ◎ 上村 勝
- ◎ 深堀 好敏
- ◎ 匿名 六千円
- ◎ 匿名 二万円
- ◎ 匿名 三千円

(敬称略)

寄付者紹介
ありがとうございます

- ◎ 維持会員 1、238名
 - ◎ 賛助会員 173名
 - ◎ 学生会員 14名
 - ◎ 臨時会員 10名
- 平成21年12月14日現在

会員数報告



旧商業学校近くの防空壕跡の前で
(上記「TOPICS!」碑巡り関連写真)